

今様から河川を考える

1 淀川と江口の遊女

01 『梁塵秘抄』三七五番。

京より下りしとけのほる 島江に屋建てて住みしかど そも知らず打ち捨てて いか祭れば  
百大夫 験無くて花の都に帰すらん

(京から下ってきた「とけのほる」)。島江に屋を建てて住んだものの、なぜか知らぬが捨て去  
つてゆく。どう祭ればよかったのか百大夫よ。その験もなく花の都に帰ってしまったようだ)

02 『体源抄』に載る、江口の遊女の謡った今様。

よしなの我らが独り寝や かばかりさやけき冬の夜に 衣は薄くて夜は寒し 頼めし人は待て  
ど来ず

(駄目な私の独り寝よ。これほど凍てつく冬の夜に、衣は薄く夜は寒い。頼みにしているあの  
人は待てども来ない)

大江匡房の『遊女記』。京から淀川を下って河内国に分かれるところに江口があり、摂津国に  
至ったところに神崎があると記し、「京洛より河陽に向かふ時、江口の人を愛し、刺史以下西  
国より江に入るの輩、神崎の人を愛す」とも述べる。

『撰集抄』「江口、柱本など云ふ遊女がすみ家を見めぐれば、家は南北の岸にはさみて、心は旅  
人のしばしの情けを思ふさまに」

03 四七五番

淀河の底の深きに鮎の子の 鵜といふ鳥に背中食はれてきりきりめく いとをしや

(淀河の底の深いところで鮎の子が、鵜という鳥に背中を食われてきりきりともがいている、  
かわいそうだ)

04 三三五番

鵜飼はいとほしや 万劫年経る亀殺し 鵜の首を結び 現世はかきてもありぬべし 後生我が  
身をいかにせん

(鵜飼は気の毒なことだ。鵜の餌に万劫も生きる亀を殺し、鵜の首を結んで鮎を吐かせている。  
現世はそうしても過ごせようが、後生はその身をどうするのだろうか)

05 盃と鵜の食ふ魚と女子は 法無きものぞ去来二人寝ん (四八七番)

(酒と鮎と女子の三つがそろえば、どうにもならないさあ二人で寝ようとするか)

06 三九〇番

淡路の門渡る特牛こそ 角を並べて渡るなれ しりなる女牛の産む特牛 背斑小女牛は今ぞ行  
く

(淡路の門を渡る牡牛たちは、角を並べて渡る。最後に進む女牛の産んだ牡牛、背が斑の小さ  
な女牛が今渡つてゆくよ)

『国牛十図』「淡路牛」。『平家物語』の月見の章「須磨より明石の浦づたい、淡路」。淀川にも  
淡路荘という摂関家の荘園が成立。典葉寮の味原牧という牛牧があった。大江匡房の『遊女記』  
に江口の近くの「典葉寮の味原厨」。藤原頼通の高野山参詣の記録『宇治関白高野山御参詣記』  
に「乳牛牧の前の水絶へ瀬に改む、弥よ往還の煩有り」。『延喜式』。乳牛牧では毎年四歳から  
十二歳までの母牛と犢とが乳牛院に送られるものと定めている。

07 三三六番

楠葉の御牧の土器造 土器は造れど娘の顔ぞ好き あな愛しやな あれを三車の四車の愛敬輦  
に打ち載せて、受領の北の方と言わせばや

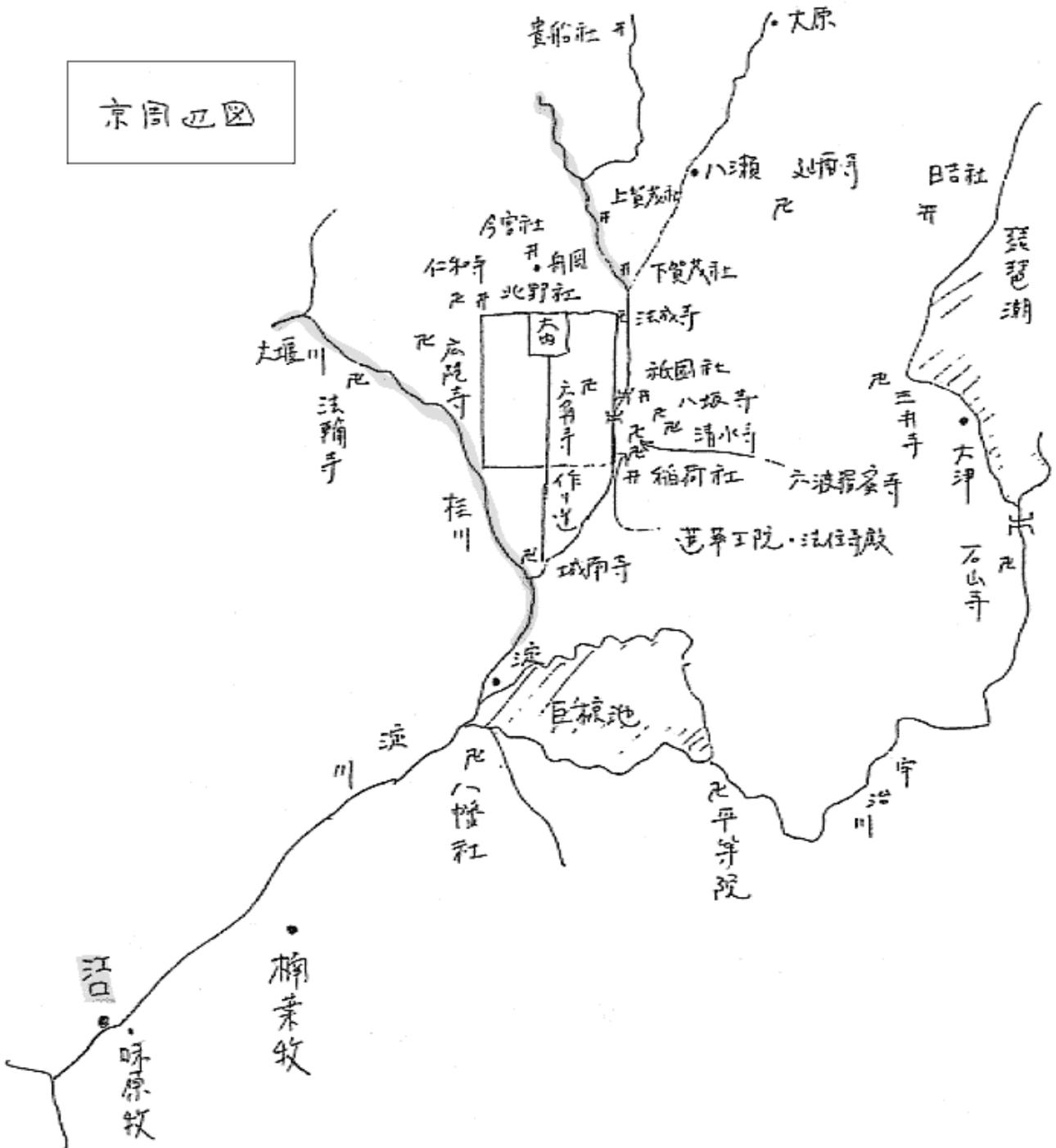
(楠葉の御牧に住む土器造り。土器こそ造っているが娘は器量よし。ああ美しい。それを三台

も四台もの婚礼車に載せて、受領の北の方と言わせたものだ  
08 二六一

八幡へ参らんと思へども 賀茂川桂川いとやし あなはやしな 淀の渡に船うけて迎へ給へ  
大菩薩

(八幡へ参ろうと思つても、賀茂川や桂川は流れがたいへん速い。ああ速いことだ。淀の渡に  
船を浮かべて、お迎え下さい八幡大菩薩よ)

09 石清水深き誓ひの流れには 幾瀬の人か渡されぬらむ (四九七番)



2 桂川と大井川

21 三〇七番

いづれか法輪にまいる道 うちの通りの西の京 それ過ぎて や 常盤林のあなたなる 愛敬  
流れくる大堰川

(どれが法輪寺へ参る道であろうか。内野通りに西の京に出て、それを過ぎたところで、や、  
常盤林の向こうにある、愛敬の流れてくるのが大堰川だよ)

『拾芥抄』に大井河(傀儡居住上一町許)。「藤原為家「寄傀儡恋 大井河岸のとまやの竹柱う  
かりし節やかぎりなりけん」

22 三〇九番

嵯峨野の興宴は 鵜舟筏師流紅葉 山陰響かす箏の琴の音、いずれも浄土の餐宴に異ならないほどだ)

23 三〇八番歌

藤原俊成「大井川かがりさしゆく鵜飼舟いく瀬に夏の夜を明すらむ」  
嵯峨野の興宴は 山負ふ桂 まうまう車たにてうが原、亀山法輪や大堰川、ふち々々風に神さび松尾の 最初の如月の 初午に富配る

(嵯峨野である興あるのは、山を背にする桂、回る回る車田に、てうが原、亀山、法輪や大堰川。そのふちふちの風に、神さびのする松尾。その松尾神社の最初の如月の初午の日には富が配られる)

24 三八五番

西山通りに来る樵夫 を背を並べてさぞ渡る 桂川 しりなる樵夫は新樵夫な 波に折られて尻杖捨ててかきもとるめり

(西山通りにやって来る樵夫たちが、背中を並べて急流を渡っている、桂川で。その最後にいる樵夫は新米の樵夫だな。波に腰を折られ尻杖を捨ててもがいている)

25 四五〇番

月は船星は白波雲は海 いかにも漕ぐらん 桂男は唯一人して

(月は船であり、星は白波であり、雲は海である。そこをどう漕いでいくのだろうか。桂男が唯一人で)

### 3 加茂川

31 三一四番

いづれか清水へ参る道 京(極くだ)りに五条まで 石橋よ 東の橋詰四つ棟六波羅堂 愛宕寺大仏深井とか それを打ち過ぎて八坂寺 一段上りて見下ろせば 主典大夫が仁王堂 塔の下天降り末社 南を打ち見れば 手水棚水とか 御前に参りて恭敬礼拝して見下ろせば この滝は様がる滝の 興がる滝の水

石橋は清水橋参詣の橋。『明月記』建仁二年五月十三日条には「五条東自清水橋クグメ地路也」。六波羅堂は空也が鴨川の東岸に造った堂に始まる六波羅蜜寺。愛宕寺は六波羅蜜寺に東隣する珍皇寺。大仏は雲居寺の大仏。八坂寺は八坂の法観寺。塔は八坂塔。「主典大夫が仁王堂」は塔の上から真つ先に見た 愛宕寺境内にあった堂舎の一つ。「塔の下天降り末社」は祇園社の末社牛王地社。

32 観音験を見する寺 清水石山長谷の御山 粉河江なる彦根山 間近く見ゆるは六角堂 (三二三番)

33 三四三番

君が愛せし綾蘭笠 落ちにけり 賀茂河に河中に それを求めむと尋ぬとせし程に 明けにけり明けにけり さらにさらさやけの秋の夜は

(あなたが大事にしていた綾蘭笠が、落ちましたよ、賀茂河にその河中に、それを探そうと拾おうとするうちに、夜が明けてしまいましたよ明けてしまいましたよ、さらさらさわやかな秋の夜が)

34 千早振賀茂の川辺の藤波は 懸けて忘るる時の間ぞ無き (五〇二番)

35 御生引き引き連れてこそ千早振 賀茂の川波立ち渡りけれ (五〇四番)

36 神山の麓を求むる御手洗の 岩打つ波や万代の神 (五〇六番)

37 思ふ事なく川上に迹垂れて 貴船は人を渡すなりけり

(思う事がないといふこの川に迹を垂れて、貴船大明神は人を浄土にお渡しになることよ)

38 貴船の内外座は 山尾よ河尾よ奥深吸葛 白石白髭白専女 黒尾の前駆はあはれ内外座や  
(貴船の境内の内外に祭られているのは、山尾・河尾・奥深・吸葛であり、さらに白石・白髭・白専女などもある。また黒尾の前駆はおそろしや、内外の社よ)

『覚禅抄』の「呪詛神」「貴布禰、須比加津良、山尾、河尾、奥深」  
和泉式部が詣でて「物思へ沢の蛍も我身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」と、夫にうとんぜられたことを嘆く歌を詠んだところ、神からの「奥山にたぎりておつる滝つ瀬のたちまちばかりもの思ひそ」といふ返歌があった(『後拾遺集』)。

39 岩神三所は今貴船 参れば願ひぞ満て給ふ 歸りて住所を打ち見れば 無数の宝ぞ豊かなる  
(岩神の三所は今貴船として祭られている、そこに参れば願いを満たしてくれる 歸つて住所を見やると、そこには無数の宝がいっぱいである)

#### 4 河原と社

##### 41 二六九番

大将立つといふ河原には 大將軍こそ降り給へ あづちひめぐり諸共に 降り遊ぶ給へ大將軍  
(大将がたつといふ河原には、大將軍に降りてきて欲しい、的山を経巡って一緒に 降り遊ぶ  
で欲しい大將軍よ)

##### 42 二五五番

祇園精舎の後には 世も世も知られぬ杉立ててり 昔より山の根なれば生いたる杉 神の験と  
見せんとして

(祇園精舎(祇園社)の後には 良くは知られない杉が立っている、昔から山の根であるから  
生い立っている杉であるな、神の験を見ようとして)

##### 43 三九三番

彼処に立てるは何人ぞ 稲荷の下の宮の大夫御息子か 真実の太郎やな 俄にあか月の兵士に  
付い差されて 残りの衆生達を平安に護れとて

(あそこに立っているのは誰だろうか、稲荷社の下の宮の大夫神主の御息子か、本当の総領だ  
な、突然に暁に警護の兵士に指名され、残りの人々を平安に守れというわけだ)

##### 44 五一二番

稲荷には禰宜も祝も神主も無きやらん 社壊れて神さびにけり

(稲荷社は禰宜も祝も神主もないのだろうか、社が壊れて神さびた雰囲気とする)

##### 45 五一四番

稲荷なる三つの群鳥あはれなり 昼は睦れて夜は独り寝

(稲荷社にある三つの社の三つの群鳥はかわいそうだよ、昼は遊び睦れているのに夜は独り寝  
だ)

##### 46 二七一番

内には神巫す 中をば菩薩御前 橘小島のあだ主 七宝蓮華は鴛鴦剣

(宇治の内には神がいらっしやる、三殿のうち中殿は八幡大菩薩、橘小島の橋姫社、鳳凰の七  
宝蓮華に鴛鴦剣)

宇治の離宮明神の宇治上神社。中殿に八幡大菩薩が、宇治橋の西の橋の小島には橋姫が祭られ  
ていた。「あだ主」はなまめかしい人の意味で橋姫。「七宝蓮華は鴛鴦剣」とあるのは平等院鳳  
凰堂の七宝でできた蓮華とオシドリ羽。